

水響 水星交響楽団

第60回定期演奏会

一橋大学管弦楽団創立100周年記念

マーラー
交響曲第8番
変ホ長調「千人の交響曲」

指揮 齊藤 栄一

2019.11.4 (月・祝) 14:00 開演 (13:30 開場)

すみだトリフォニーホール 大ホール

Symphony No. 8

ごあいさつ

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団(略称:水響)の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

水響は今年創立35周年を迎え、そして、今回の演奏会は60回目の節目の定期演奏会となりました。加えて、今年、母体である一橋大学管弦楽団の創立100周年ということもあり、水響にとって最も重要な作曲家の一人であるマーラーの交響曲第8番を演奏いたします。「千人の交響曲」というタイトルがそのまま示す通り、8人の独唱者に加え、2つの合唱団と児童合唱、そして5管編成のオーケストラを要する、音楽史上でもほとんど例をみない規模の作品であり、マーラーを多数演奏してきた水響にとっても、なかなか越えられない巨大な壁のような存在でした。しかしながら、選曲会議の場で「この記念の年に何を演奏するか」という議題を私から提示したところ、参加していた主要メンバーのアタマの上に「8番やってみたい!」というフキダシがたくさん見えた(ように思えた)ので「そろそろ8番いきますか」⇒全員の拍手、という形で決まりました。機は熟していたのです。

とはいえ、合唱やソリストの当てが具体的にあつたわけではなく「やっぱりいろいろと大変だよな」と目の前にある壁ばかりが気になっていたのですが、ひょんなことから、今回合唱指導をお願いした郡司博先生とお会いする機会がありました。郡司先生には、水響草創期のベートーヴェン交響曲第9番「合唱付き」、それからその2年後にマーラー交響曲第2番「復活」でご指導いただいて以来、およそ30年ぶりの再会でした。昔ばなしに花が咲き「あの時はお世話になりました」というお言葉まで。覚えていただけただけで恐縮至極でしたが、恐る恐る今回のマーラー交響曲第8番のお話をしたところなんとご快諾。壁がガラガラと崩れ、向こうにアルプスの緑なす山々が見えたような気がしました。

それから約2年。本当にいろいろなことがありましたが、あつという間に本番を迎えてしまいました。あとはやるしかありません。マーラー自身が「宇宙の鳴動」と表現した大伽藍をどこまで具現化できるか、今まで水響が培ってきたマーラー愛をもって全力で演奏いたします。ぜひごゆっくりお聴きください。

水星交響楽団 運営委員長 植松 隆治



本日のプログラム

グスタフ・マーラー 交響曲第8番 変ホ長調 「千人の交響曲」

第1部 賛歌：来たれ、創造主たる聖霊よ (約25分)

第2部 ゲーテ「ファウスト」第2部より終幕の場 (約60分)

第1ソプラノ	大いなる罪の女	國光 ともこ	第2アルト	エジプトのマリア	中島 郁子
第2ソプラノ	懺悔する女	朴 瑛実	テノール	聖母マリアを崇拝する博士	松原 陸
第3ソプラノ	栄光の聖母	高橋 美咲	バリトン	法悦の隠者	藪内 俊哉
第1アルト	サマリアの女	加納 悦子	バス	瞑想する隠者	成田 眞

※第1部と第2部の間には休憩はありません。予めご了承ください。

水星交響楽団

水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マールキューリー」やセロ弾きのゴージュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。



©Takashi Fujimoto

指揮
齊藤 栄一

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲『ねじの回転』（関西初演）の副指揮者を務める。84年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ『カルミナ・ブラーナ』（95年、東京文化会館）、『ダフニスとクロエ』（99年、新宿文化センター）を指揮した。その後、『カルミナ・ブラーナ』のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの『トリオンフィ』3部作（4台のピアノと打楽器）を指揮している。明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に『往還する視線 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学』（近代文芸社）、『振っても書いてもしょせん酔狂』（水響興満新報社）がある。



合唱指揮
郡司 博

指揮を山田一雄、ハンス・レーヴライン両氏に師事。朝比奈隆、若杉弘、外山雄三、岩城宏之、J.フルネ、O.レナルト、E.インバル、C.エッシェンバッハ、H.J.ロッチュ、チョン・ミョンフンなど、内外一級の指揮者と共演し、プロオーケストラの代表的な演奏会でも活躍している。89年、90年シノーポリ指揮『千人の交響曲』、91年PMFの『復活』、96年リンツ・ブルックナー管弦楽団との『テ・デウム』、99年ヴェルディ『レクイエム』、04年マーラー『千人の交響曲』（G.ベルティーニ指揮）等、いずれもその指導力は高く評価されている。またバッハを中心とするオラトリオ指揮者としても活躍。ザルツブルグ大聖堂より5回にわたり指揮者として招聘された。95年、96年ベルリン交響楽団主催『第九』演奏会、2000年テル・アビブにてイスラエル・フィル主催ミレニアム・コンサートで『第九』、03年ノルウェーにてオスロフィルによるベルリオーズ『レクイエム』（M.プラッソン指揮）に合唱指揮者として参加。96年ダブリンにて『メサイア』の指揮、02年ソウルナショナルアーツセンターにて『第九』を指揮し、絶賛を浴びた。認定NPO法人おんがくの共同作業場の理事として、オーケストラ付き声楽作品の演奏普及に努めるだけでなく、＜地雷で傷ついたアフガニスタンの子供たちに車椅子を贈るベネフィットコンサート＞を続け、また東日本大震災以降、＜音楽復興支援プロジェクト＞を立ち上げ、被災地の演奏家を招いて共演する等、精力的に活動している。

<http://kammer.ne.jp/gunji/>



ソプラノ
國光 ともこ

武蔵野音楽大学卒業、愛知県立芸術大学大学院修了。新国立劇場オペラ研修所を経て、文化庁芸術家在外派遣研修員としてイタリアへ留学。第16回F・チレア国際声楽コンクール第2位、第12回日本モーツァルト音楽コンクール第1位ならびに2005大賞、第3回東京音楽コンクール第2位。帰国後、新国立劇場において『フィガロの結婚』、『オルフェオとエウリディーチェ』、『ペレアスとメリザンド』、『ばらの騎士』、『パルジファルとふしぎな聖杯』、『タンホイザー』などに出演するほか、調布市民オペラ『椿姫』タイトルロールをつとめるなどオペラの舞台で活躍。また『メサイア』、『マタイ受難曲』、『ヨハネ受難曲』、『ロ短調ミサ』、モーツァルト『レクイエム』、ベートーヴェン『ミサ・ソレムニス』、メンデルスゾーン『交響曲第2番《賛歌》』、ヴェルディ『レクイエム』、フォーレ『レクイエム』、『カルミナ・ブラーナ』、ラター『子供たちのミサ』など宗教曲、オラトリオや交響曲のコンサートソリストとしても積極的に活動している。二期会会員。



ソプラノ
朴 瑛実

早稲田大学第一文学部卒業。東京藝術大学音楽学部卒業、同大学大学院音楽研究科修士課程、博士後期課程修了。第79回日本音楽コンクール声楽部門第1位、併せて岩谷賞、木下賞受賞。2013年度三菱地所賞受賞。これまでにJ.S.バッハによる教会カンタータや受難曲、ヘンデル『主は言われた』、『メサイア』、モーツァルト『レクイエム』、ベートーヴェン『合唱幻想曲』、『第九交響曲』、『ミサ・ソレムニス』、ハイドン『天地創造』、『四季』、シューベルト『変イ長調ミサ』、『変ホ長調ミサ』、メンデルスゾーン『聖パウロ』、ブラームス『ドイツレクイエム』、ヴェルディ『レクイエム』、ドヴォルザーク『スターバト・マーテル』、『レクイエム』、グノー『聖セシリアミサ』等のソプラノ独唱を務めた。声楽を佐々木正利、故 朝倉蒼生、佐竹由美、佐々木典子の各氏に師事。



ソプラノ
高橋 美咲

富山県出身。東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業。昨年、同大学院音楽研究科修士課程オペラ専攻を修了。修了時に、日本学生支援機構『特に優れた業績による返還免除の認定（全額）』を受ける。第27回富山県青少年音楽コンクール声楽部門最優秀賞、並びに全部門総合で青少年音楽大賞、富山県知事賞、福井直秋音楽賞、北日本新聞社長賞を受賞。第12回高校生のための歌曲コンクールで優秀賞(最高位)を受賞し、副賞としてイタリア短期留学を経験。第35回富山県新人演奏会で富山県知事賞、北日本新聞音楽奨励賞を受賞。第18回北陸新人登竜門コンサートオーディションに合格し、オーケストラ・アンサンブル金沢と共演。声楽を黒崎隆憲、福島明也、Eugenio Fogliatiの各氏に師事。2018年にローマで開催された西本智実指揮『ヴァチカン国際音楽祭2018』で、ヴェルディ『レクイエム』、グノー『聖チェチリア荘厳ミサ曲』のソプラノソリストを務め、好評を博す。またその演奏の様子が世界約35カ国に中継された。今年開催された『バチカン国際音楽祭2019記念公演』においては、国内4公演にてベートーヴェン『第九』のソリストを務める。その他コンサートソリストとして、ベートーヴェン『第九』、ヘンデル『メサイア』、バッハ『カンタータ11番』、モーツァルト『荘厳ミサ』、『ヴェスプレ』、ハイドン『ネルソンミサ』、シューベルト『ミサ曲第3番』、フォーレ『レクイエム』等で多数の公演に出演している。オペラでは、第63回藝大オペラ定期公演モーツァルト歌劇『フィガロの結婚』スザンナ役でデビュー。Cantoyama第2回公演ドニゼッティ作曲『ドン・パスクワレ』ノリーナ役で出演。その他ハイライト形式で『魔笛』パパゲーナ役、『秘密の結婚』カロリーナ役、『愛の妙薬』アディーナ役、『ラ・ボエーム』ミニ役等を演じる。イルミナートアーティスト。HP:<https://misa618b.wixsite.com/official>



メゾ・ソプラノ
加納 悦子

東京藝術大学大学院を修了後、ドイツ国立ケルン音楽大学で学び、ケルン市立歌劇場のオペラスタジオから専属歌手として契約。ザルツブルク音楽祭、シュトゥットガルト州立歌劇場、ベルギー・フランドルオペラ、オランダ・ロッテルダムのゲルギエフ・フェスティバルにも出演。日本国内でも新国立劇場やびわ湖ホールなどのオペラに度々登場している。NHK交響楽団等の主要オーケストラとも共演を重ねて、マラー『大地の歌』などは記憶に残る名演となっている。年末の『第九』公演のアルト・ソロとしても多く共演。2015年川口リリアホール『歌の花束』シリーズでのシューベルト・シューマン歌曲による『辞世の歌』が2015年度文化庁芸術祭参加公演となり、また昨年3月のソロリサイタル『ヘルダーリンの詩による20世紀歌曲』のように、ドイツ・リート演奏を軸に「極めてドイツ的な姿勢の中に日本人の感性を融合させた、世界に誇るドイツ・リートを発信」（国土潤一・評）。CD『メアリ・スチュアート女王の詩/シューマン後期歌曲集』（ALM RECORDS）は第51回レコード・アカデミー賞声楽部門を受賞。国立音楽大学教授。



メゾ・ソプラノ
中島 郁子

東京藝術大学卒業、同大学院修士課程独唱科修了。シエナ・キジアーナ音楽院マスタークラス修了。文化庁海外派遣研修員としてミラノに留学し、ミラノ市立音楽院等で研鑽を積む。第72回日本音楽コンクール第2位、第56回ヴィオッティ国際音楽コンクール声楽部門第3位、第15回R.ザンドナーイ国際声楽コンクール・ザンドナーイ特別賞等、国内外のコンクールに入賞。オペラでは、東京二期会にて2012年ヴェルディ『ナブッコ』フェネーナ、2016年ヴェルディ『イル・トロヴァトーレ』アズチーナ、2017年プッチーニ『蝶々夫人』スズキ、2018年プッチーニ『三部作』公爵夫人・ツイータ、日生劇場にて2016年『セヴィリアの理髪師』ロジーナ、藤沢市民オペラにて、2016年ロッシーニ『セミラーミデ』アルサーチェ役（コンサート形式）等、多くの役に出演し好評を博す。また宗教曲やマーラー交響曲のソリストとしても高い評価を得ている。東京藝術大学声楽科非常勤講師。二期会会員。



テノール
松原 陸

東京藝術大学卒業。同大学院修士課程オペラ研究分野修了。修了時に宗次徳二賞、武藤舞賞を受賞。英国王立音楽院で研鑽を積む。BCJA奨学金を受賞。国内外コンクール入賞の他、第3回 Monterosso al Mare国際オペラコンクール第1位。在英国日本大使館開催の天皇誕生日セレモニーで日本人代表に選出され両国歌を独唱し好評を博した。第60回藝大大学院オペラ公演でデビュー後、椿姫、リゴレット、ラ・ボエーム他で主要キャストを務める。第64回藝大メサイアを皮切りに、国内外にて数多の作品でソリストを務め、将来の活躍を囑望されている若手テノール。現在フェリス女学院大学非常勤講師。



バリトン
藪内 俊哉

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院修士課程独唱科修了。第12回日仏声楽コンクール第2位入賞。第23回奏楽堂日本歌曲コンクール第2位。第51回朝日新聞社主催『藝大メサイア』バスソリストでデビュー。その後『第九』（小林研一郎指揮）、モーツァルト、フォーレ、ドニゼッティ、スッペ『レクイエム』、デュルフレ『レクイエム』（飯守泰次郎指揮、東京シティフィル）、ドヴォルザーク『スターバト・マーテル』、バッハ『ヨハネ受難曲』、『マタイ受難曲』、『ロ短調ミサ』、『教会カンタータ』等のソリストを務める。2008年、ザルツブルクに於いてイェルク・デームス氏の講習を受講。ミラベル宮殿にてシューマン『詩人の恋』を氏と共演。オペラでは、モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』、『フィガロの結婚』をはじめ、様々なオペラに出演。2011年、ルーマニア国立コンスタンツァ歌劇場に於いて、ドニゼッティ『ランメルモールのルチア』エンリーコ役でゲスト出演し、ヨーロッパデビューを果たす。2年後に再演、再び招聘される。また、中国西安人民劇院、北京人民劇院にて、ドン・ジョヴァンニを演じ、好評を博す。2018年7月、二期会本公演ウエバー『魔弾の射手』オットカール役で二期会デビュー。聖徳大学音楽学部講師。日本演奏連盟、日本声楽アカデミー各会員。二期会会員。



バス・バリトン
成田 眞

名古屋市出身。愛知教育大学教育学部を経て、東京藝術大学音楽学部声楽科を首席で卒業。同大学院修士課程オペラ科修了。声楽を中川牧三、水谷俊二、林剛一、畑中良輔、小野光子、平野忠彦、アントン・グアダーニョ、カルロ・メリチャーニ（伊ミラノ留学中）の各氏に師事。その歌唱は学生時代から注目され、1991年、93年には、東京藝術大学主催『メサイア』『第九』のバス・ソロに選ばれる。コンサートにおいては、ヴェルディ・モーツァルト・フォーレ・デュルフレ『レクイエム』、ブラームス『ドイツ・レクイエム』、モーツァルト『戴冠ミサ』『ハ短調ミサ』、ベートーヴェン『第九』『ミサ・ソレムニス』、バッハ『マタイ受難曲』『ロ短調ミサ』、ハイドン『四季』『天地創造』、ロッシーニ『スタバト・マーテル』等々、これまでに、内外の著名な指揮者や交響楽団との共演の数は枚挙に暇がない。オペラにおいては、1995年横浜シティ・オペラ公演『ドン・ジョヴァンニ』レポレッロ役で本格的デビュー。二期会本公演では『椿姫』『カルメン』に出演した。グスタフ・クーン指揮『サントリーホール・オペラ・シリーズ』、大野和土指揮/東京フィル『オペラ・コンチェルト・シリーズ』、ロジェストヴェンスキー指揮/読響『イオランタ』他、小澤征爾指揮『東京のオペラの森』『ヘネシー・オペラ・シリーズ』『小澤征爾音楽塾公演』、また『サイトウ・キネン・フェスティバル松本』では長年に渡り定期的に出演した。新国立劇場では昨年、『魔笛』弁者、僧侶、武士II、『カルメン』ダンカイロ役で出演。今夏、大野和土指揮/オペラ夏の祭典2019『トゥーランドット』官吏役で出演。1996年、97年にはシドニー・オペラ・ハウスに招かれ『第九』のソリストを務める。また、2005年ウイーン楽友協会ホール/ヴェルディ『レクイエム』、2012年にはNYカーネギーホール/モーツァルト『レクイエム』に出演。海外においても好評を博し、存在感ある確かな演奏に定評のある実力派バス・バリトンとして活躍している。

PROGRAM NOTE

乱れた歩調のマーラー交響曲第8番 曲目解説

軽いジャブの応酬から対話は始まる

- 客: どうも、大変お久しぶりでやんす。水響がマーラー交響曲第8番(以下、マーラーの番号付き交響曲は「第〇番」とのみ言いましょう!)をやるので、ちょいとこの曲の話を伺おうと思ひまして。
- 主人: お、僕が第8番の解説に適任だと思つたのかい? そりゃ随分光栄だな(喜)。
- 客: いえね、ナントカの一つ覚えみたくマーラーばかり演奏してりゃ、あんたみてえな阿呆でも、一つくらいはひと様のお役に立つネタを提供できるんじゃないかねえかと。
- 主人: 本人を目の前に「あんたみてえな阿呆」とは何だ!(怒)。
- 客: あれ、聞いてましたか?
- 主人: だから誰と話してるんだよ!
- 客: そう言われてみると、ちょいとおかしな話ですね。

交響曲第8番について、まずは問題設定

- 主人: ちょいともなにもあるもんか。何を聞きたいんだ?
- 客: どうでもいいけど、ここまでの流れ、完全に7年前の第6番解説のネタ流用ですな。
- 主人: 7年前の解説なんて誰も覚えてないからそれでいいんだよ。余計なこと云うなって!
- 客: なんとまあ身も蓋もない…まあ真面目な話わたしが聞きたいのはね、第8番ってのがマーラーらしい曲なのかマーラーらしくない曲なのか、マーラーの全作品の中で第8番がどういう位置付けになるのか、これらの点なんでやんす。
- 主人: なんだ、急にまともなこと言い出すとこちらも却ってひるんじやうね。
- 客: 相手の意表を突く。これが高等戦術というやつでげす。じゃ、順を追って第1番から…

第8番への、というかマーラー交響曲への遙かなる道のり

- 主人: いや、そういう事なら話はヴァーグナーの『ニーベルングの指環』に遡るな。
- 客: ちょ、そもそもそれマーラーの作品じゃないし! どういうことなんでげす?!
- 主人: 相手の意表を突く。これが高等戦術というやつさ。「音楽の歴史を変える」クラスの偉大な作曲家というものは総じて、それだけ強烈なラディカルさを持っているわけだから、従来の楽壇やら聴衆からは当初烈しく排撃される。極度に攻撃的な人格のヴァーグナーがそのような状況に陥った時、自分を認めない現状の聴衆、楽壇、世界システムへの破壊願望が芽吹くのは実に自然な事だ。その願望が作品として結実したのが、既存の世界システムが破壊され尽くし「王」

達が没落する物語、『ニーベルングの指環』だ。

- 客: それマーラー関係ないやん!!
- 主人: Play it cool! Get cool! Bust cool! Go cool!(落ち着け!×4)
- 客: なに『ウェストサイドストーリー』のアイスが歌う『Cool』を気取ってんだよ。むしろあなたはウェストサイズを気にした方がいいんじゃないですか?
- 主人: ほっとけ。若き日のマーラーは共に新たな時代を切り拓く日を夢見ながら親友ハンス・ロットらと『指環』に熱狂していた。マーラーは『指環』の破壊願望を理解し、精神とシンクロもしただろう。そのマーラーの実質的作品1が『嘆きの歌』だ。これは精神のあり方としてミニチュア『指環』ともいべき作品で、破壊志向に満ち満ちたテーマに加え、ハーブを6台も要するスケール感まで踏襲してて微笑ましいほどだ。
- 客: なるほどねえ。で、ようやく第1番の話になるワケですかい?
- 主人: いやお次はハンス・ロットの交響曲第1番だYO!
- 客: ちょっと待ったらんかい! いつになったらマーラーの交響曲の話になるんだよ!
- 主人: マイナーだったロットだが、最近日本でも演奏頻度が増し、ようやくロット・ルネサンスが到来した観があるね。
- 客: いや、ルネサンスでも髭男爵でもいいんですけど、それとマーラー関係あるんですか?
- 主人: いや関係おありおあり、主人がオオアクリクイに殺されて一年が過ぎちゃうよ。
- 客: 2006年に流行ったスパムメールのタイトルなんて覚えてる人、殆んどいないって!
- 主人: でも君は覚えているじゃないか。共に大のヴァーグナー党だったロットは、二十歳の頃に交響曲第1番を書き上げ、反ヴァーグナー派のブラームスに批評を仰ぐ。しかし、案の定徹底的に批判され、それが元で精神に変調を来し、そのまま精神病院で窮死している。この交響曲、先行作曲家の影響も顕著だが何よりマーラーに非常によく似ている。
- 客: でもこれ、第1番の10年以上前の作品じゃないですか。
- 主人: つまりロットの交響曲第1番のスコアを目にすることのできる立場にあったマーラーは、この作品に溢れる独創的なアイデアをそのまま自作に取り入れたんだな。
- 客: え? 「取り入れた」つつうと随分ポジティブに聞こえますけど、もしかしてそれは「パクリ」ということですか?
- 主人: もしかしなくてもいってしまえばそういうことになる。しかも「取り入れて」いるのは一度や二度じゃあない。それだけロットの作品は無数の可能性に満ちていたといえるだろう。
- 客: マーラーのパクリネタだから、『嘆きの歌』の次にロットの交響曲が来るってワケですか。
- 主人: 3割はイエスだが、7割はキリスト、じゃなかったノーだ。
- 客: ギャグの方は流しますけど、どういうことですか?

主人：ロットの交響曲第1番がマーラーに最も強い影響を与えたのは、そういったアイデア以上にこの作品が持っているイデー(理念)だね。

客：イゲー(意外)な話になってきやしたね。

主人：こっちもギャグは流さず。厳しい苦難を乗り越えアルカディア(理想郷)における安息を求め、それがロットの交響曲の理念だった。現実のロットは最初の苦難で打ち砕かれてしまったんだけどね。『嘆きの歌』で『ニーベルングの指環』にインスパイアされた破壊願望を遂げたマーラーは、その後の作曲の主軸となる交響曲において、ひたすらこの「アルカディアへの希求」を行い続けたといっている。それはマーラーが生涯抱き続けた根源的な問い「生とは何か、死とは何か」と表裏一体を為したイデーといえるだろう。彼の頭にはロットが交響曲第1番で描いたイデーが、いわば「模範演技」として常に鳴り響いていたんだらう。だからこの曲が重要と考えているのさ。

ようやく話はマーラーの交響曲に?! いや世の中そんなに甘くないぜヒャッハア~!

客：いや、大事なのはよく分かりました。でもペース配分大丈夫なんスか?既に紙数の1/3ですよ!

主人：こままで重要なのさ。後は内面の変化の問題だからね。さて、この先ねっとり進むコースからサラッと駆け足のコースまで松竹梅取り揃えているけど、どれにする?

客：じっくり伺いたいですが、終電の時間もありますし、梅コースでいいですよ。

主人：あ、息子が佐智の人ね。

客：それ、犬神梅コッす!あつしが頼んだのは梅コース!

主人：(頓着せず)毎回終電を気にしてるけど、そんな気になるならもっと早くから問答を始めやいのに。

客：(手を合わせながら)参りました。もう脱線はいいですから本題を御願ひしやす。

主人：なるほどきみの言わんとする意味がだいたい見当がつかしました。きみはこう言いたいのでしょうか、早く本題に入れ!

客：悪質な冗談はやめて下さい。僕はプログラム係をクビになるかもしれないですよ。ほら僕の顔はだんだん蒼褪めていくではありませんか……ってなんで字数が足りない今、つげ義春『ねじ式』のパロディをガッツリここで!!(号泣)

主人：キミもしっかり『ねじ式』流に依ってるやん。まあいい、今後は真面目にやるよ。

というワケで話はようやくマーラーの交響曲に

客：お願いしますよホント。まずは第1番。もう、元は交響曲じゃなかったとかブダペスト稿がどうだとかはいいですから内容だけよろしく!

主人：この曲を『巨人』と呼ぶのが適切かどうかは兎も角、ジャン・パウルの『巨人』にインスパイアされているのは『巨人』を読めば明白。『マンフレッド交響曲』と同じく、印象的な情景だったり主人公の心情だったりを投影した音楽だ。ただ本質は「アルカディアの希求」といっていいだろう。

客：続いて第2番です。これは一橋大学管弦楽団が創立百周年記念演奏会で演奏しますが(12月13日(金)19時開演、

東京芸術劇場)、非常にスケールが大きいですね。

主人：この曲はベートーヴェンの交響曲第9番様式で当時の彼がやりたいことをやり尽くした作品だ。「(アルカディアで永遠に)生きがために(現世において)我死なん」と歌われるクライマックスは、マーラーのロットに対するこの時点での精一杯の、そして最高の回答だっただろう。

客：いいペースですね。次は彼の最長交響曲たる第3番です。

主人：第2番以上に破格の構成の作品だ。草花、獣、人、天使を超え、愛(=神)が語りかける終楽章は、正にアルカディアそのものの悠久の境地が歌いこまれているね。ただフィナーレの、悠遠一苦悩を往還し続ける「永劫回帰」的傾向が、本来なら到達点であるアルカディアを相対化させかねない不安感を聴く者に抱かせるのもまた事実。これはマーラー自身の懐疑の表出でもあったんだらう。

客：第3番には崩壊の兆しもある、と。すると第4番は?

主人：指揮者マーラーがウィーンの宮廷歌劇場の総監督となるためカトリックに改宗した後に完成させたのが第4番だ。マーラー最短の交響曲となり、外見的には古典型四楽章形式で、第3番で到達した境地をコンパクトに歌い直した曲のようにもみえる。

客：「ようにもみえる」ってことは…

主人：そう、実は終楽章「天上の生活」におけるアルカディアは、姉妹作の歌曲「浮世の生活」で餓死する少年(=自らのルーツを抹殺し改宗したマーラー自身)がいまわの際に夢見た幻想に過ぎぬという皮肉な意味がこもっている。彼のアルカディア観は崩れ始めている。ちなみに第8番がブリッジとなって中期から後期に移行するように、第4番は初期と中期をつなぐ作品だ。

快調なペースでマーラー中期に話は移る

主人：ドンドン行くぞ!続いては第5番!

客：第一楽章の悲劇的な葬送行進曲が、終楽章の圧倒的な勝利のコラールで終結する「暗から明へ」的作品ですよ。

主人：表面的にはまさにその通り。ただ過剰にきらびやかな盛り上がりフィナーレが茶化したように終わるところから分かるように、彼はアルカディアとロマン派定型フォーム「暗から明へ」を高い次元で描きながらも、同時に相対化(パロディ化)もしている。彼の内面は、アルカディアの肯定でも絶対的否定でもない、アンヴィヴァレント(両義的)なものとなっているね。

客：イデーが崩れていくのを見るのは辛いですね。曲はみんないいけど。

主人：第4番、第5番で勝利やアルカディアを相対的なものとして描いたマーラーは、続く第6番において、絶対的な敗北を描いた。しかし彼の生涯の世俗的な絶頂期の作品だけに、昂然と運命に闘争に挑み敗北する様すら、エネルギーに(逆説的だが)肯定的に描かれている。この曲から受ける印象は、敗北の悲惨さというよりは、エネルギーの凄まじさだよ。

客：確かに、不思議と聴き終わって「悲しい」という気持にはならない曲ですよ。

主人：歌劇場や家庭での遠からぬ破局が避けられないのを実感したためか、第7番は複雑な形ではあるが彼の悲劇的な内面が克明に表現されているね。

客：そうですね？「暗から明へ」様式は第5番にとってもよく似てませんか？

主人：確かに第6番を挟み、第5番と第7番は双生児のようにも見えるのだが、全く深刻さが違う。

客：どう違うんです？

主人：第7番フィナーレでは、絶対的な勝利を描きつつ、同時にそれを嘲笑うその先で、実生活が破局必至の状況下、自分が嘲笑したその勝利を誰よりも強く乞い求め、現実のものとなるはずもないと分かっているながらもそこに縋ろうとしている。いわば三重の屈折を通し彼の心理が表現されている。彼のアルカディア観は悲劇的な分裂をみせている。

そして遂に話は第8番に

客：第5番の話聞いた時の感慨が更に重くのしかかってきますね。

主人：ともあれ、ここまでのマーラーの精神的な歩み、そしていたましい内面の絶叫が噴出する第7番の次に、第8番が生まれてきたことは忘れてはならないね。

客：ここで冒頭の、第8番がマーラーらしいのか否なのか、という話になりますね。

主人：彼の全ての作品の中で、全編に合唱が活躍し続ける曲はたった二つ。『嘆きの歌』と第8番だ。第2番と第3番、『大地の歌』もそれぞれ条件を満たしてはいない。

客：なるほど。じゃ第8番は例外的な曲だと。

主人：さらに重要なのはマーラーで唯一、全編にわたって肯定的理念に貫かれているということだね。彼はこれまで孤独なアウトサイダー（彼は自らを「三重の意味で疎外されたもの」と称していた）として、そんな自分の生に意味があるのか、アルカディアに到達出来るのか、という問題と対峙してきた。その彼がこの曲については「全ドイツ国民に捧げる」「大宇宙が響き始める様子を想像して欲しい。その音楽はもはや人間の声ではなく、軌道をめぐる惑星であり、太陽なのだ」などと随分景気のいい事を言っている。だからこそ、この全編に肯定感みなぎる第8番は、彼の本心ではないという否定的な評価がアドルノをはじめ多く聞かれるのも事実なんだ。

客：ということはもうマーラーらしくない、で確定ですね。

主人：（無視して）マーラーは1906年の夏にこの曲のスケッチを、翌年夏にオーケストレーションを完成させた。が、この一年の間に、彼は苦難に立て続けに見舞われている。ヴィーン宮廷歌劇場監督の座を失い、愛する長女を失い、妻は健康を崩し、そして自身も死に至る心臓病の診断を受けたのだ。

客：どれ一つとっても大きな打撃ですね。

主人：これらはいずれも第8番全曲のスケッチを終えてから立て続けに起きたことではあるが、その予兆やストレスはスケッチを書いている最中も絶えず彼を苦しめていたろう。破局への予感を抱えながら、彼は生涯で唯一の全肯定交響曲を生み出したんだ。察するに次々と圧倒的な苦難に襲われればこそ、第7番において三重の屈折したプリズムを介していたアルカディアへの希求の念を、第8番においてはある種臆面なさをもって（懐疑を抱いた瞬間に彼の精神は押し潰されてしまうだろうから）、その実、本心としては縋るような想いで作曲したんじゃないかな。

客：するってえと、どういうことになるんです？

主人：あくまでも「悲劇的闘争者」としてのみマーラーを見ようと

するなら、第8番で彼は内面を語っていないと受け取られるかもしれない。しかし彼の精神的な遍歴を知った上なら、「アルカディアを希求する者」としての彼が、第8番においても他のあらゆる交響曲同様、自分の最深奥を吐露しており、他の交響曲にはみられない強烈な肯定感、何らの矛盾も嘘もない事が解る。それどころか、ハンス・ロットから受け継いだアルカディアへの想いはこの第8番においてこそ、全創作の頂点に達し完成されたといえる。つまり第8番は、外面的には例外なくめだが彼の歩みの中で何ら矛盾はなく、それどころかその歩みの中でしか生まれ得ない、彼の「アルカディアの希求」というイデーが最高の形で結晶した、マーラーの最高傑作の一つなんだよ。

客：いや恐れ入りました。彼の作品は、かくも深く彼の精神史とリンクしてるんですね。

主人：『嘆きの歌』と交響曲、さらにいえば『ニーベルングの指環』とロットの交響曲第1番は、単体でも一つの宇宙なんだけれど、それらが作られた順に並んだ時、更に巨大な宇宙が浮かび上がってくるんだ。第8番を「単なるデカイ曲」ではなく、第7番までの血みどろの苦闘の歩みと、至高の三部作といえる大地の歌・第9番・第10番という全く違った世界観の作品群をつなぐ、いわば重要な「ミッシングリング」であると認識して演奏したり聴いたりすることは、極めて意味があるだろう。第8番を体験することによって、マーラーが生涯をかけて追求し、そして信じようとした究極の理念が明らかになり、画竜点睛が成るといえるんだよ。

最早極めて終盤ですが、第8番の具体的な内容について少々

客：それにしても改めて巨大な曲です。

主人：うん、管弦楽150名近くにパイプオルガン、児童合唱と2パートに別れる大合唱で数百名、独唱者8名を要する、文字通り人類史上最大編成の音楽作品だよな。

客：それに構成も破格です。

主人：二部からなるが、第一部が25分弱、第二部が60分弱といびつな上、第一部は9世紀頃に作られたラテン語による賛歌、そして第二部は19世紀前半にドイツ語で書かれゲーテ『ファウスト』の最終場面からとられている。主題が緊密にリンクするよう緻密に構築してあるとはいえ、千年の時空を超えた二つの言語による背景も意図も全く違う詩の結合は、相当大胆な荒唐だ。

客：第一部は本当に豪快です。

主人：第一部はどこまでも壮麗に豪放に昇り詰めていく音楽だ。唯一陰る箇所である「我等が弱き肉体を」も、他の曲のように絶望的な深刻さに陥ることはなく、再現部に向けた激的な闘争の箇所も、ハリウッド映画よろしく、圧倒的な勝利が確実にムードで展開し、事実再現部に至るや極限ともいべき勝利と歓喜の壮大な世界が現出する。

客：第二部は『ファウスト』最終場面ですね。

主人：でもファウストの台詞はないんだ。彼の魂が天に運ばれている際の音楽だからね。

客：動きが縦方向の話なんですねえ(笑)。

主人：その通り。横の動きがほぼ一切ない、垂直方向オペラみたいなもんだよ。第一部の過剰なまでの音響に酔いしれていると、第二部全体の室内楽的な響きに驚かされるだろう

が、作品としての完成度、感動の深さは第一部を上回るね。

客：確かに分かってみると、ひたすらギンギンな第一部より遙かに心に沁みますね。

主人：それにしても多分全曲で一番難しいのは、第二部の合唱の出からバスが歌う瞑想する隠者のシーンにかけてだろうね。去年は日本で僅か34日の間になんと8回も第8番が演奏され、僕はその全てを聴くか弾くか歌うかしたけど、その8公演ともこの難所を無傷で切り抜けた演奏はなかった。

客：ちょ、そんなハードル上げちゃって大丈夫なんですか？！

主人：いや、こう言つときゃ失敗してもお客様は同情してくれるし、万が一？うまくいったら「水響すげえよ！」って思ってくれるじゃないか。これが高等戦術というやつさ。

客：またか！

主人：最も心打たれるのは終盤、ファウストによって滅ぼされたにも拘らず、天女となってもひたすらにファウストの救済をこいねがうグレートヒェンの血を吐くような祈りと、それを聞き入れ高みからファウストを赦す栄光の聖母の聖性だね。これは『ファウスト』の筋を知らない聴き手にも至高の感動を与えるだろう。ラストは最早誰が歌っているかが判然とせぬ「神秘の合唱」で結ばれるが、このシーンはゲーテの思索の、そしてマラーのアルカディア希求イデーの究極到達点でもあるんだ。両者が見事に合一しているといっていだろう。

紙数がないけどここでちょっとだけ『ファウスト』について

客：きっちり念押ししますがあくまでも紙数の許す範囲で、『ファウスト』の話をしていただいてもよろしいですか？

主人：うん、『ファウスト』は世界文学の最高峰の一つで、ドイツの大偉人ゲーテが約60年の歳月をかけて完成させた二部からなる巨大な悲劇だ。粗筋は、生涯を懸けて全てを知り経験しつくそうとして果たせなかった老学者ファウストが、悪魔メフィストフェレスと「ファウストに彼が望むあらゆる経験をさせる。しかしファウストが、どこかの瞬間で満足し『時よとまれ、お前はあまりに美しい』』と言ったら、彼の魂は地獄に連れ去られる」という賭けをする。第一部は小市民的恋愛悲劇で、メフィストフェレスの導きで若返ったファウストは市井の清純な娘グレートヒェンと恋におちるが、様々な経緯でファウストは彼女の兄を、グレートヒェンは母を誤って殺し、更に彼女はファウストの子どもを墮胎し処刑されてしまう。深く悲しんだファウストだが、第二部では力強く蘇り、経済、軍事、ギリシャ古典世界を次々と経験し、最後には自然を征服すべく干拓事業に取り掛かる。年老い盲目になったファウストは悪魔たちが自分の墓を掘っている音を聞き、自分が干拓に託した「人類の永遠の伸張への努力」という理想を人民が共有する姿を夢想し、「時よとまれ、お前はあまりに美しい」と叫び息絶える。メフィストフェレスは賭けに勝ったと喜ぶが、ファウストが発した言葉は、伸張しようとするをやめて安逸に現状にとどまる意味ではなく、努力し高みを求め続けるあり方を永続させたいと願う言葉であったため、神意にかなない、彼の魂は天使たちに救い出される。そして聖書に登場する三人の贖罪の女と天女となったグレートヒェンらの願いを聖母マリアが聞き入れ、

ファウストの魂は天に迎えられる、というもの。第8番第二部は、救われたファウストの魂が昇天しているラストの箇所にあたる。畢竟、『ファウスト』は、晩年のゲーテがエッカーマンに語った「自分はこれだけ努め励んだのだから、自分の生が終わった瞬間に、自然は自分に対し新しい生を提供する義務がある」という信念を極度に壮大に押し広げて文学作品に結晶させたものといえるだろうね。

その後のマラー — 蛇足かもしれませんが

客：最後に、第8番以降の彼の歩みをささっと御願います。

主人：第8番で自らのアルカディア観を描ききり、画竜点睛成った筈のマラーだったが、立て続けの不幸の後にニューヨークのメトロポリタン歌劇場に落ちのびて、肉体に過大な負荷を強いられることになる。このように彼のイデーが大きくゆらいでいく中で『大地の歌』は作曲された。終楽章「告別」では第8番の後に彼が辿りつかざるを得なかった悲劇的な境地が切々と語られる。夢破れ逆境を味わえば味わう程、そして病で人生の終着点が遠くないことを認識すればこそ一層、この世の美しさを愛したいという願いはやみがたくなる。生涯追及し続けたアルカディアは、彼岸ではなく「大地」に、現世にあったのだ。しかしそれが分かった今、彼は間もなくこの世から去っていかねばならないのだ。

客：なんと切ない。次はいよいよ、水響メンバーにとって最も重要な曲、第9番ですね。

主人：うむ！彼の全創作の頂点である第9番は、最も純粋に、最も熱く、荘厳な感動をもって、生への烈しい執着とそれでも別れてゆかねばならぬ苦悩と未練とを歌いあげている。絶望的憧憬の中、最後の最後まで未練を残し、躊躇いの裡に曲は凄まじい緊張感を伴った、奏者にも聴者にも万感の想いを喚起せずにはおかぬ永遠の沈黙の中にいつ果てるともなく消えていく。このあらゆる想いのこもった沈黙こそ、マラーが全創作の果てに辿り着いた、最も崇高な境地といえるだろう。

客：しかしその境地すらひっくり返してしまうのが最終作品第10番(全曲版)ですね。

主人：そうなんだ。第8番以降、当初の世界観が劇的に変貌し「大地の歌」と第9番という二つの偉大な傑作が生まれたのが、更に第10番(全曲版)のスケッチが産み出される過程において第二の、そして生涯最後の大転換が起きたんだよ。まあこれについては近い将来、水響が第10番(全曲版)を取り上げる際、こつてりたつぷりと松コースで語ろう！

客：オフコース！番組は『月曜から夜ふかし』で？

主人：それ、マツコ・デラックス！ユー、「デラック」が余分でデラッ苦しいYO！

客：「デラ」...しょうもない名古屋弁ダジャレが大トリかよ！

(遂に水響が第8番まで到達したことに万感の想いを抱く高橋ピロシ)

(歌詞訳 大矢晴代/提供 認定NPO法人おんがくの共同作業場)

第1部 賛歌:来たれ、創造主たる聖霊よ

I. Teil Hymnus : Veni, creator spiritus

Veni, creator spiritus,
Mentes tuorum visita;
Imple superna gratia,
quae tu creasti pectora.

来たれ、創造主たる聖霊よ、
人々の心を訪れ、
あなたが創造した魂を
天界の恵みで満たしてください。

Qui tu Paraclitus diceris,
Donum Dei altissimi,
Fons vivus, ignis, caritas,
et spiritalis unctio.

あなたは守護者、
至高なる神の賜物、
生命の泉、火、慈愛であり、
そして霊的な聖油と呼ばれます。

Infirma nostri corporis,
Virtute firmans perpeti.
Accende lumen sensibus.
Infunde amorem cordibus.

われらの肉体の弱さを
永遠の力によって強くし、
われらの感覚に光をともし、
心に愛を注ぎ込んでください。

Hostem repellas longius,
Pacemque dones protinus;
Ductore sic te praevio
vitemus omne pessimum.

敵を遠くに退け、
ただちに平和をお与えください。
先導者たるあなたにならって、
われらがあらゆる邪悪を避けるよう、お導きください。

Tu septiformis munere,
dexteræ paternæ digitus.

あなたは7つの贈り物により、
父なる神の右手の指にいらっしゃる。

Per te sciamus da Patrem,
noscamus atque Filium,

あなたによって父なる神を知り、
御子キリストをも認識できますように。

Te utriusque Spiritum
credamus omni tempore.

聖霊なるあなたを、どんな時にも
信じる力をわれらにお与えください。

Da gratiarum munera,
da gaudiorum praemia;
Dissolve litis vincula,
adstringe pacis foedera.

喜びの賜物をお与えください、
恩寵の贈り物をお与えください、
争いの鎖からわれらを解き放ち、
平和の誓いを堅くしてください。

Gloria Patri Domino,
Natoque, qui a mortuis
surrexit, ac Paraclito
in saeculorum saecula.

主なる父に栄光あれ!
そして死よりよみがえった御子に、
そして守護者たる聖霊に栄光あれ!
とこしえに栄光あれ、主なる父に!

第2部 ゲーテ「ファウスト」第2部より終幕の場

II. Teil : Schlußszene aus FAUST

《終幕に至るまでのあらすじ》

あらゆる学問を究めた上で、その虚しさを嘆く老博士ファウストは、実人生で満ち足りた「美しい瞬間」を得ることができたら、自分の魂を売り渡す、という契約を悪魔メフィストフェレスと結ぶ。悪魔により若返ったファウストは、素朴で敬虔な少女グレートヘンと恋に落ちるが、悪魔の誘いによりファウストが不在にしている間に、グレートヘンは生まれた嬰兒を殺して断罪される(第1部)。その後ファウストは悪魔に導かれてさまざまな体験をし、ついに満足を得て、契約通り死ぬ。その魂をまさに悪魔が手に入れようとしたとき、天使の一群が天上からあらわれる。天使たちはバラの花を撒いて悪魔の身を焼き、ファウストの魂を高みへと運んでいく。

— 断崖、森、岩、荒れ野。聖なる隠者たちが、山腹の思い思いの場所で、岩間に座を占めている。

CHOR und ECHO

Waldung, sie schwankt heran,
Felsen, sie lasten dran,
Wurzeln, sie klammern an,
Stamm dicht an Stamm hinan,
Woge nach Woge spritzt,
Höhle, die tiefste, schützt,
Löwen, sie schleichen stumm,
Freundlich um uns herum,
Ehren geweihten Ort,
Heiligen Liebeshort.

合唱とこだま[混声合唱]

森は揺らぎ寄り、
岩は森に重くのしかかり、
木の根はからみつぎ、
幹は幹に接して立つ。
波は波を追って、しぶきをあげ、
奥深き洞窟はわれらを守る。
獅子たちは黙って
われらのまわりを親しげに忍び歩き、
清らかなるこの場所、
聖なる愛の住み処を敬う。

PATER ECSTATICUS (Baritone) (auf und abschwebend)

Ewiger Wonnebrand,
Glühendes Liebesband,
Siedender Schmerz der Brust,
Schäumende Gotteslust.
Pfeile, durchdringet mich,
Lanzen, bezwinget mich,
Keulen, zerschmettert mich,
Blitze, durchwettert mich,
Dass ja das Nichtige
Alles verflüchtige,
Glänze der Dauerstern,
Ewiger Liebe Kern!

法悦の隠者[バリトン]

— 上下にただよいながら

永遠なる歓喜の炎、
燃え立つ愛の絆、
煮えたぎる胸の痛み、
神への昂ぶる喜び。
矢よ、我をつらぬけ、
槍よ、我を突き刺せ、
棍棒よ、我を打ち砕け、
稲妻よ、我を打ち倒せ、
虚しきものは、
すべて消えうせるように、
輝け、久遠の星よ、
永遠なる愛の核心よ!

PATER PROFUNDUS (Bass) (tiefe Region)

Wie Felsenabgrund mir zu Füßen
Auf tiefem Abgrund lastend ruht,
Wie tausend Bäche strahlend fließen
Zum grausen Sturz des Schaums der Flut,
Wie strack, mit eignem kräftigen Triebe,
Der Stamm sich in die Lüfte trägt;
So ist es die allmächtige Liebe,
Die alles bildet, alles hegt.
Ist um mich her ein wildes Brausen,
Als wogte Wald und Felsengrund,
Und doch stürzt, liebevoll im Sausen,
Die Wasserfülle sich zum Schlund,
Berufen, gleich das Tal zu wässern;
Der Blitz, der flammend niederschlug,
Die Atmosphäre zu verbessern,
Die Gift und Dunst im Busen trug;
Sind Liebesboten, sie verkünden,
Was ewig schaffend uns umwallt.
Mein Inn' res mög' es auch entzünden,

瞑想する隠者[バス]

— 低い場所で

岩の断崖がわが足元で
深き谷底にどっしりと座すごとく、
数知れぬ小川がきらめき流れ、
大河の恐ろしい滝となるごとく、
みずからの力強い衝動で、
樹幹がまっすぐ空へと伸び立つごとく
すべてを形づくり、はぐくむのは、
全能なる愛なのだ。
わが身のまわりを荒々しい水音が満たし、
森も岩根も揺れ動くかのようだ!
しかしざわめきつつも優しく、
豊かな水は深く落ちゆき、
すみやかに谷をうるおす。
稲妻は炎をあげて落ちかかり、
毒と煙霧をはらんだ
大気を浄化する。
この水と稲妻は愛の使者、われらに告げる者、
永遠に創造しつつわれらを囲むものの存在を。
わが胸の内にも火を点じてほしい、

Wo sich der Geist, verworren, kalt,
Verquält in stumpfer Sinne Schranken,
Scharf angeschloss'nem Kettenschmerz.
O Gott! beschwichtige die Gedanken,
Erleuchte mein bedürftig Herz!

わが精神は乱れ、冷え切り、
鈍い感覚に縛られ、きつくつながれた
鎖の痛みに苦しんでいるのだから。
神よ！ わが雑念を鎮め、
この貧しい心を照らしたまえ！

ENGEL

(schwebend in der höhern Atmosphäre, Faustens Unsterbliches tragend)

Gerettet ist das edle Glied
Der Geisterwelt vom Bösen:
"Wer immer strebend sich bemüht,
Den können wir erlösen."
Und hat an ihm die Liebe gar
Von oben teilgenommen,
Begegnet ihm die sel'ge Schar
Mit herzlichem Willkommen.

天使たち [女声合唱]

— ファウストの不死となった魂を運び、高い空中をただよいながら

霊の世界の気高い一員が
悪の手から救われた。
「絶えず努力して励む者を、
我らは救うことができる」
しかもこの人には、愛が
天上から加勢しているのだもの、
祝福された霊たちの一群が、
心からこの人を歓迎するよ。

CHOR SELIGER KNABEN

(um die höchsten Gipfel kreisend)

Hände verschlinget
Freudig zum Ringverein!
Regt euch und singet
Heil'ge Gefühle drein!
Göttlich belehret,
Dürft ihr vertrauen:
Den ihr verehret,
Werdet ihr schauen.

昇天した少年たち [児童合唱]

— 山頂をめぐる飛びながら

手と手をつなぎ、
楽しく輪を作ろう、
踊ろう、歌おう、
清らかな思いをこめて！
神様の教えを受けて、
安心してお任せしよう。
ぼくらが敬う神様に
きっと会えるから。

JÜNGEREN ENGEL

Jene Rosen aus den Händen
Liebend-heiliger Buserinnen
Halfen uns den Sieg gewinnen
Und das hohe Werk vollenden,
Diesen Seelenschatz erbeuten.
Böse wichen, als wir streuten,
Teufel flohen, als wir trafen.
Statt gewohnter Hollenstraßen
Fuhlten Liebesqual die Geister;
Selbst der alte Satansmeister
War von spitzer Pein durchdrungen.
Jauchzet auf! Es ist gelungen.

若い天使たち [女声合唱]

愛にあふれた聖なる贖罪の女たちの
手から授けられたバラの花が、
われらを助けて勝利を得させ、
この貴い魂をわれらのものにするという
気高い仕事を成し遂げさせてくれた。
われらがバラを撒くと、悪者は避け、
バラを投げ当てると、悪魔は逃げた。
いつもの地獄の刑罰の代わりに、
悪霊たちは愛の責め苦を感じたのだ。
老獪な悪魔の頭領メフィストフェレスさえ、
鋭い痛みで全身をつらぬかれた。
勝利の声をあげよ！ 成し遂げたのだ！

DIE VOLLENDETEREN ENGEL (+Alto solo)

Uns bleibt ein Erdenrest
Zu tragen peinlich,
Und wär er von Asbest,
Er ist nicht reinlich.
Wenn starke Geisteskraft
Die Elemente
An sich herangerafft,
Kein Engel trennte
Geeinte Zwienatur
Der innigen beiden;
Die ewige Liebe nur
Vermag's zu scheiden.

成熟した天使たち [混声合唱+アルト・ソロ]

地上の残り屑を運ぶのは、
私たちには辛いこと。
たとえ石綿でできていたとしても
それは清浄ではない。
強い精神の力が
諸々の元素を
しっかり集めて握っていると、
どんな天使でも、
魂と肉体とが密接に結びついた
合一体を、分離することはできない。
ただ永遠の愛だけが
魂を肉体から引き離すことができる。

DIE JÜNGEREN ENGEL

Ich spür' soeben,
Nebelnd um Felsenhöh',
Ein Geisterleben,
Regend sich in der Näh'.
Seliger Knaben
Seh'ich bewegte Schar.

若い天使たち [女声合唱]

私はいま、
岩の頂を囲んで霧のように、
霊たちの気配が
近くうごめいているのを感じる。
昇天した少年たちの
いきいきとした群れが見える。

Los von der Erde Druck.
Im Kreis gesellt,
Die sich erlaben
Am neuen Lenz und Schmuck
Der obern Welt.
Sei er zum Anbeginn,
Steigendem Vollgewinn
Diesen gesellt!

彼らは地上の重荷から解放され、
寄り集まって輪になり、
天上の世界の
新しい春と華やぎに触れて、
生気を養っているのだ。
この方、ファウストも、まずは
この少年たちの仲間入りをして、
充実の高みへと登っていけばよい!

DOCTOR MARIANUS (Tenor)
(in der höchsten, reinlichsten Zelle)

聖母マリアを崇拜する博士 [テノール]
— 最も高く清らかな洞窟で

Hier ist die Aussicht frei,
Der Geist erhoben.
Dort ziehen Frauen vorbei,
Schwebend nach oben.
Die Herrliche mitten in
Im Sternenkranz,
Die Himmelskönigin,
Ich seh's am Glanz!

ここは見晴らしが開け、
精神が高められる。
あそこを女たちが通り過ぎる、
上方に向かってただよいながら。
その中心に、立派な方のお姿が
星の冠をつけておられる、
あれは天界の女王だ、
輝きでそれとわかる。

DIE SELIGEN KNABEN

昇天した少年たち [児童合唱]

Freudig empfangen wir
Diesen im Puppenstand;
Also erlangen wir
Englisches Unterpfand.
Löset die Flocken los,
Die ihn umgeben!
Schon ist er schön und groß
Von heiligem Leben.

ぼくらは喜んで、
さなぎの状態のこの方を迎える。
これでぼくらは、天使になれる
保証をもらったんだ。
この方をくるんでいる
まゆを取り除こう。
この方は神聖な生命をうけて、
すでに美しく大きくなっている。

DOCTOR MARIANUS (Tenor)
(Entzückt)

聖母マリアを崇拜する博士 [テノール]
— 恍惚として

Höchste Herrscherin der Welt!
Lasse mich im blauen,
Ausgespannten Himmelszelt
Dein Geheimnis schauen!
Billige, was des Mannes Brust
Ernst und zart beweget
Und mit heiliger Liebeslust
Dir entgegenträget!
Unbezwinglich unser Mut,
Wenn du hehr gebietest;
Plötzlich mildert sich die Glut,
Wie du uns befriedest.

世界を支配する至高の女王よ!
青く張り上げられた天幕のうちに、
あなたの神秘を私にお示してください!
受け容れてください。
男の胸を厳かに、
かつ優しく動かすもの、
そして神聖な愛の喜びをもって
あなたに向かわしめるものを!
あなたが気高く命じてくだされば、
われらの勇気は不動のものになり、
あなたがわれらを満たしてくだされば、
激情もすぐに和らぐ。

(Tenor, Chor)

Jungfrau, rein im schönsten Sinne,
Mutter, Ehren würdig,
Uns erwählte Königin,
Göttern ebenbürtig.

[テノール、合唱]

最も美しい意味で清らかな処女、
崇拜を受けるにふさわしい御母、
われらのために選ばれた女王、
神々と同じ身分のお方。
— 栄光の聖母マリアがただよい来る

CHOR

合唱

Dir, der Unberührbaren,
Ist es nicht benommen,
Dass die leicht Verführbaren
Traulich zu dir kommen.
In die Schwachheit hingerafft,
Sind sie schwer zu retten.
Wer zerreißt aus eig'ner Kraft
Der Gelüste Ketten?
Wie entgleitet schnell der Fuß
Schiefe, glattem Boden?

触れるべからざる聖母様、
けれど誘惑に負けやすい人たちが
あなたにおすがりすることは、
禁じられてはおりません。
自分の弱さに引きずられた人たちが
救うのは、容易ではありません。
みずからの力で情欲の鎖を断つことが
誰にできましよう?
傾いた、滑らかな床の上では、
いかに簡単に足がすべり落ちることか?

CHOR DER BÜSSERINNEN

Du schwebst zu Höhen
 Der ewigen Reiche;
 Vernimm das Flehen,
 Du Ohnungleiche!
 Du Gnadenreiche!

贖罪の女たち [女声合唱]

あなたは永遠なる国の
 高みにただよっておられます。
 この切なる願いをお聞きください、
 慈しみ深き聖母様!
 たぐいなき御方!

MAGNA PECCATRIX (Soprano)

Bei der Liebe, die den Füßen
 Deines gottverklärten Sohnes
 Tränen ließ zum Balsam fließen,
 Trotz des Pharisäer Hohnes;
 Beim Gefäße, das so reichlich
 Tropfte Wohlgeruch hernieder;
 Bei den Locken, die so weichlich
 Trockneten die heil'gen Glieder –

大いなる罪の女 [第1ソプラノ]

マグダラのマリア:
 聖書「ルカによる福音書」第7章第36節

神となられました御子のおみ足に、
 パリサイ人の嘲りにもかかわらず、
 香油に代えて涙を注いだ
 その愛にかけて、
 あれほど豊かに香料をしたたらせた
 あの壺にかけて、
 あれほど柔らかかに、神聖なる御身体を
 ぬぐったこの巻き髪にかけて、願いあげます。

MULIER SAMARITANA (Alto)

Bei dem Bronn, zu dem schon weiland
 Abram liess die Herde führen;
 Bei dem Eimer, der dem Heiland
 Kühl die Lippe durft' berühren;
 Bei der reinen, reichen Quelle,
 Die nun dorther sich ergießet,
 Überflüssig, ewig helle,
 Rings durch alle Welten fließt –

サマリアの女 [第1アルト]

聖書「ヨハネによる福音書」第4章

その昔、アブラハムが家畜の群れを
 導いて行った泉にかけて、
 救世主の御唇に、涼しく触れることを
 許された水瓶にかけて、
 今はそこから湧き出て、
 あふれんばかり、永遠に澄みきって
 あまねく世界に流れゆく
 清く豊かな泉にかけて、願いあげます。

MARIA AEGYPTIACA (Alto)

Bei dem hochgeweihten Orte,
 Wo den Herrn man niederließ;
 Bei dem Arm, der Von der Pforte,
 Warnend mich zurücke stieß;
 Bei der vierzigjäh'gen Buße,
 Der ich treu in Wüsten blieb;
 Bei dem sel'gen Scheidegruße,
 Den im Sand ich niederschrieb –

エジプトのマリア [第2アルト]

— 淫蕩な生活ゆえ、エルサレムの教会に入ろうとすると目に見えぬ
 力で就き戻される。聖母マリアに祈り、ヨルダンの砂漠で48年間
 贖罪を続け、遺言を砂上に書いて死んだ

主を座らせ申した
 いとも神聖なる場所にかけて、
 私を戒めて、教会の門から
 私を突き放したその腕にかけて、
 私が忠実に砂漠で続けた
 40年間の贖罪の行にかけて、
 私が砂に書き残した
 至福なる辞世の言葉にかけて、願いあげます。

ZU DREI

Die du großen Sünderinnen
 Deine Nähe nicht verweigerst.
 Und ein büßendes Gewinnen
 In die Ewigkeiten steigerst,
 Gönn' auch dieser guten Seele.
 Die sich einmal nur vergessen.
 Die nicht ahnte, dass sie fehle,
 Dein Verzeihen angemessen!

3人で

いと罪深い女たちにも近くへ寄ることを拒まず、
 また贖罪による功德を
 永遠のものに高めてくださる聖母様、
 この善良な魂にも、
 ふさわしいゆるしをお与えください!
 ただ一度、みずからを忘れたのみで、
 みずからの過ちに気づかなかった魂に。

UNA POENITENTIUM (Soprano)
(sonst Gretchen genannt, sich anschmiegend)

Neige, neige,
 Du Ohnungleiche,
 Du Strahlenreiche,
 Dein Antlitz gnädig meinem Glück!
 Der früh Geliebte,
 Nicht mehr Getrübte,
 Er kommt zurück.

懺悔する女 [第2ソプラノ]

— かつてグレートヒェンと呼ばれた女
 聖母にすがりつつ

お向けください、
 たぐいなき御方、
 光あふれる聖母様、
 その御顔をお恵み深く、私の幸福にお向けください。
 かつての恋人、
 今はもう濁りのない人、
 あの方が戻って来たのです。

CHOR SELIGER KNABEN
(in Kreisbewegung sich nähernd)

Er überwächst uns schon
An mächt'gen Gliedern.
Wird treuer Pflege Lohn
Reichlich erwidern.
Wir wurden früh entfernt
Von Lebechören.
Doch dieser hat gelernt:
Er wird uns lehren.

昇天した少年たち[児童合唱]
—— 輪を描いて近づきながら

この方はもう手足もたくましく、
ぼくらより大きくなった。
忠実にお世話した報いも、
たっぷりしてくれるだろう。
ぼくらは人の世から
幼いうちに遠ざけられてしまった。
でも、この方は多くを学んできたから、
ぼくらに教えてくれるだろう。

UNA POENITENTIUM (Soprano)
(Gretchen)

Vom edlen Geisterchor umgeben,
Wird sich der Neue kaum gewahr,
Er ahnet kaum das frische Leben,
So gleicht er schon der heil'gen Schar.
Sieh, wie er jedem Erdenbande
Der alten Hülle sich entrafft,
Und aus ätherischem Gewande
Hervortritt erste Jugendkraft!
Vergönne mir, ihn zu belehren,
Noch blendet ihn der neue Tag.

懺悔する女[第2ソプラノ]
—— グレートヒェン

気高い霊の群れに囲まれて、
この新来の方は自分自身がわからない様子、
新たな生命に気づかない様子、
でもこの方はもう、神聖な方々に似てきている。
ご覧ください、この方はあらゆる地上の絆から、
古い殻から抜け出し、
そして霊気の衣から、
新たに若々しい力が湧き出しています！
あの方を導くことをお許しください、
新しい日がまぶしくて、見えないようだから。

MATER GLORIOSA (Soprano)

Komm! Hebe dich zu höhern Sphären!
Wenn er dich ahnet, folgt er nach.

栄光の聖母[第3ソプラノ]

いらっしやい、もっと高く昇っておいで！
お前を感じれば、その人もついて来るでしょう

CHOR

Komm! Komm!

合唱

さあ！ さあ！

DOCTOR MARIANUS (Tenor), Chorus
(auf dem Angesicht anbetend)

Blicket auf zum Retterblick,
Alle reuig Zarten,
Euch zu sel'gem Glück
Dankend umzuarten!
Werde jeder bess're Sinn
Dir zum Dienst erbötig;
Jungfrau, Mutter, Königin,
Göttin, bleibe gnädig!

聖母マリアを崇拜する博士[テノール、一部合唱]
—— 顔を伏せて拝みながら

救い主のまなざしを仰ぎ見よ、
罪を悔いるすべての優しき人々よ、
祝福された運命にしたがい、
感謝をもってみずからを変えるために！
良き心をもつ者がすべて
あなたにお仕えますように。
処女よ、御母よ、天の女王よ、
女神よ、永久(とわ)に恵みを与えたまえ！

CHORUS MYSTICUS

Alles Vergängliche
Ist nur ein Gleichnis;
Das Unzulängliche,
Hier wird's Ereignis;
Das Unbeschreibliche.
Hier ist's getan;
Das Ewig Weibliche
Zieht uns hinan.

神秘の合唱

すべて移ろいゆくものは
幻影にすぎず。
満たされざりしものが
ここに実現される。
名状しがたきものが
ここに成し遂げられた。
永遠に女性的なるものが
われらを導き引き上げる。

水星交響楽団とマーラーの35年史

前史（1984～1987年）

水星交響楽団(以下、水響)は1984年、一橋大学管弦楽団を卒業した当時の社会人1年生が国立市内の寿司店で開催した「初ボーナスコンパ」で産声をあげました*1。「学生時代にやれなかった曲をやろう!」を合言葉に、ごく初期の3年間は、ベートーヴェンやブラームスなどを中心に、学生のときに編成の都合その他の巡りあわせて泣く泣く選曲から落としたものなどを採り上げていました。

学生のオケ活動の集大成である年1回の定演では、マネージ学年(当時は3年生)が選りすぐりの曲を並べるわけですが、そこには一定の傾向がありました。

- ・ソリストとか合唱には、あまりお世話になりたくない。純器楽曲で勝負
- ・4年間でメンバーが入れ替わるため、4年サイクルで同じような曲が選ばれる

ひるがえって、社会人オケにはそのような心理的制約はありません。やらない、やれないと決めてかかっていただけで、本当はやりたい曲がたくさんあるはず。こう視野を広げてみると、「学生時代にやれなかった曲」の意味が徐々に変化を始めました。

このような流れの中、水響は1987年の第4回定演でベートーヴェンの『第9』*2を採り上げ、団員はこれまで経験したことのない新鮮で豊かな感動を得ることとなったのです。

挑戦（1987～1990年）

『第9』の成功は、

「うちら、歌が入ってる曲だって、もういつでもサクッとやれちゃうよなあ」

「ってことは、マーラーの歌付きの交響曲だって、いつでもやれるってことだよね」

という思考回路を水響首脳陣にもたらすこととなりました。水響結成の布石となったとも言うべき「国立マーラー楽友協会管弦楽団」*3においては、1983年から毎年のように9番(当然マーラーの)をやっていましたから、水響はもともとマーラーへの情熱もリテラシーも人一倍のものを持っています。それでも歌が入っている曲は着手のしようがなかったわけですが、いまやその軛から解き放たれました。マーラーのどの交響曲にも対応できるのです。そしたらもう『復活』をやるっきゃないでしょう。夢がどんどん膨らんでいきました。

首脳陣ははやる気持ちを抑えて、いったん“『第9』+X=『復活』”の方程式を立て、“X=4番”の解を導きました。独唱を伴う4番(1987年)で着実に経験値を上げ、満を持して『復活』に挑戦することにしたのです。

1989年、武蔵野市民文化会館で行われた『復活』の本番は大成功。フィナーレで、レンタルの電子オルガン(パイプオルガンの代わり)の音量調節が突如きかなくなるハプニングがあり、オケや合唱をかき消さんばかりの大音量で鳴りわたりましたが、逆にそれが宗教的な荘厳さを醸し出し、本番の成功に一役買ったと当時の記録にあります。

これに気をよくして、すぐさま翌年には5番を演奏。水響におけるマーラー路線がここに定着しました。

発展（1991～2000年）

「学生時代にやれなかった曲をやる」の意味は、「やりたい曲があればとにかくやる」に大きく変わりました。マーラーの交響曲がその主要な位置を占めることは言うまでもありません。3年間の充電期において、次に取り組んだのは3番(1993年)。極大化したオーケストラに、アルト独唱、女声合唱、児童合唱を伴い、世界最長の音楽(演奏時間1時間45分)としてギネスにも載ったという超大曲です。

それ以降も、おおむね3年のスパンで6番、7番を相次ぎ演奏。着実にレパートリーを増やしていきました。編成上の問題はもはや何の障害にもなりません*4。やりたい曲を、意のままに。水響の快走が続きます。

一方で、この間、首脳陣は運営方針の大転換を行いました。それまで水響には「一期一会」すなわち「一度やった曲は二度とやらない」という暗黙の了解がありました。同じ曲を繰り返しやっていたのではマンネリに陥ってしまうと考えていたからです。しかし結成から十数年、若い団員も増えてきて、「小学生のときの話で縛られても困ります」との苦情があちこちで聞かれるようになってきました。とうとう首脳陣は決断し、「過去にやった曲なんでもあり宣言」を発布。ブラームスの3番が再演第1号となりました(1997年)。

実は、この方針転換の背景には、首脳陣の周到な目算があったとの噂があります。このあたりで「再演OK」の禁断の果実を食べておかないと、ある思いが叶わなくなってしまうと考えたというのです。

その思いとは、「2000年のミレニアムに、『復活』をどうしてもやりたい!」

果たせるかな、ミレニアム企画『復活』は団員からも喝采で迎えられ、再演が決まりました。年末の都内主要ホールはプロオケによる連日の『第9』ラッシュでほぼ先押さえされており、世紀末にちなんだ他の催しもひしめく中、会場の確保は困難を極めました。奇跡的に東京芸術劇場の審査を通過し、本番にこぎつけました。フィナーレでは、備え付けのちゃんとしたオルガン(失礼)がちゃんとした荘厳さを与え、『復活』は再演も大成功。団員は歓喜と興奮のうちに世紀の変わり目を迎えることができたのでした。

*1 フランス革命前夜の「テニスコートの誓い」(1789年)にちなんで、「赤川寿司の誓い」と呼ばれる。

*2 ご存知のとおり、ベートーヴェンの『第9』は、独唱4人と混声合唱を伴う当代随一の大交響曲。

*3 齊藤さんのタクトの下、クリスマス前後のわずか3、4回の練習で、毎年(まれに年始)に底冷えのする兼松講堂においてマーラー9番の本番を挙げる、一橋大学管弦楽団のアングラの別働隊。1983年以降、幾度かの中断はありつつもこの企画がいまなお継続しているのは、技術的な仕上がりよりも、マーラー畢生の到達点であり人類の共通遺産でもあるこの曲に定期的・集中的に没入することが人生でどれほどかけがえのないことであるかを、参加者がみな理解し継承しているからだと言える。またこの企画は「マーレリアン養成ギブス」の役割も果たし、マーラーを自己の血肉としたオケメンを安定的に水響に供給することにも寄与している。

*4 交響曲第6番、7番は純器楽の交響曲だが、6番ではハンマー(舞台面に向け大きな木槌を打ちおろす)、7番ではテナーホルン、マンドリン、ギターなど、いわゆる「特殊楽器」がいくつも要求されている。

充実（2001～2014年）

この時期になると、再演となる曲も多く（5番、3番、6番）、初顔合わせとなったのは若書きの『巨人』と、最終期の『大地の歌』の2曲のみでした。再演の3曲はいまや水響の掌中にあるところ、ツボを押さえた演奏でお客様にも団員にも大きな満足をもたらしましたが、『巨人』の青臭さ、『大地の歌』の東洋的厭世観は、俗塵にまみれた中年サラリーマン世代にとってはどちらも心境的に最も遠い位置にあり、この世代を中心勢力とする水響としてはアプローチに少々難儀した気がします。

とはいえ、本番ではきっちりとアウトプットを出し、水響におけるマーラー演奏の“幅”をさらに広げる貴重な機会となりました。

そして、2014年の第50回定演では、なんと『復活』を再々演。アニヴァーサリーイヤーにおける『復活』演奏もすっかり定着した感があります。

そして（2014年～）

同じ2014年に「水響創立30周年記念演奏会」と銘打って演奏した9番については、もはやコメントの必要もないでしょう。特筆するとなれば、たった数回の練習でこの大曲の本番に臨んだという点で、「国立マーラー楽友協会管弦楽団」の系譜をしっかりと引いたということでしょうか。

7番の再演を経て、60回の節目の定演で、ついに『千人』へ。1番から9番まで、35年に及ぶ水響マーラー・チクルスの完成です。この快挙に向けた団員の並々ならぬ意気込みは、水響きってのマーラー通であるヴァイオリンの高橋さんの軽妙かつ濃厚な語り口（別頁）から、おのずと感じとっていただけることでしょう。

マーラーの交響曲をひととおり演奏した水響の次なるマーラー・ライフは、どんなものになるのでしょうか。今後も演奏し続けることは疑いのないところとして、まずは未完となった10番の補筆完成版*5をやるということになるかもしれませんし、あるいは、9番を“ちゃんと”やるということになるかもしれません。

ただ、筆者のような、水響をつくった先輩方の情熱と奔走ぶりを肌で知る古株団員には、もし後者のようなことになると、それは何かあまりにも意味がありすぎるようにも思えて、少し怖いです。願わくば、本当にふさわしいときが来るまで、それはとっておきたいです。何が本当にふさわしいときなのかは、まだわかりませんが…。

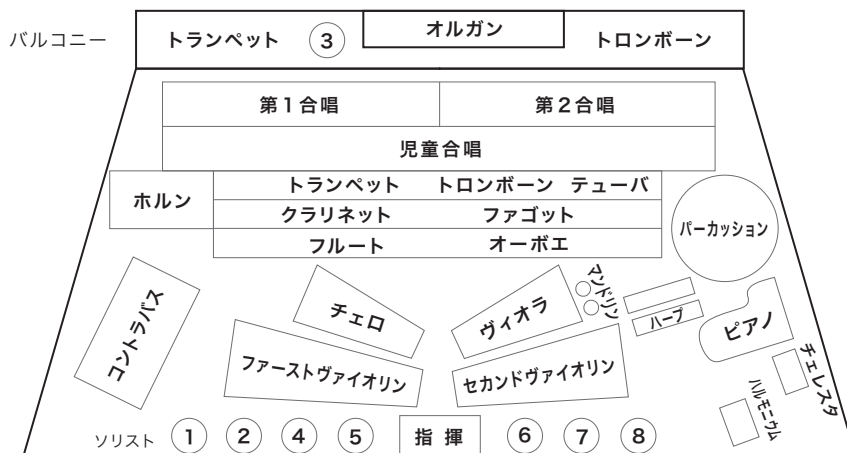
*5 マーラーは9番の後、10番にとりかかったが、第1楽章のみを（ほぼ）完成して没し、第2～5楽章はスケッチのみが遺された。このスケッチをもとに、のちの研究者等が補筆を行い、演奏可能なものとして「完成」させた。いくつかのバージョンが存在するが、デリック・クックによるものが最も著名。

（横地 篤志）

〈水響 マーラー・ヒストリー〉

演奏会	曲名	編成	上演
第5回定期演奏会	交響曲第4番	独唱・管弦楽	1987年9月
第8回定期演奏会	交響曲第2番『復活』	独唱・合唱・管弦楽	1989年5月
第10回定期演奏会	交響曲第5番	管弦楽	1990年5月
第16回定期演奏会	交響曲第3番	独唱・合唱・管弦楽	1993年5月
第20回定期演奏会	交響曲第6番	管弦楽	1996年8月
第25回定期演奏会	交響曲第7番	管弦楽	1999年10月
第27回定期演奏会	交響曲第2番『復活』（2回目）	独唱・合唱・管弦楽	2000年12月
長野演奏旅行	交響曲第5番（2回目）	管弦楽	2001年11月
第29回定期演奏会			2002年1月
第32回定期演奏会	交響曲第1番『巨人』	管弦楽	2004年2月
第37回定期演奏会	交響曲『大地の歌』	独唱・管弦楽	2007年1月
第43回定期演奏会	交響曲第3番（2回目）	独唱・合唱・管弦楽	2010年5月
第47回定期演奏会	交響曲第6番（2回目）	管弦楽	2012年10月
第50回定期演奏会	交響曲第2番『復活』（3回目）	独唱・合唱・管弦楽	2014年5月
創立30周年演奏会	交響曲第9番	管弦楽	2014年8月
第57回定期演奏会	交響曲第7番（2回目）	管弦楽	2018年4月
第60回定期演奏会	交響曲第8番『千人の交響曲』	独唱・合唱・オケ	2019年11月

〈本日の舞台配置〉



〈ソリスト〉

1. 第1ソプラノ 大いなる罪の女
2. 第2ソプラノ 懺悔する女
3. 第3ソプラノ 栄光の聖母
4. 第1アルト サマリアの女
5. 第2アルト エジプトのマリア
6. テノール 聖母マリアを崇拝する博士
7. バリトン 法悦の隠者
8. バス 瞑想する隠者

※役名は第2部

※舞台の状況により、配置が変更となる場合があります。ご了承ください。

合唱指導 渡部 智也／谷 郁／佐藤 拓／三谷 幸／加未 徹／佐々木 理子

ピアニスト 小林 牧子／越前 佳織／早川 枝里子／鈴木 祐子／秋田 友紀子／河内 菜穂／秋山 友貴

合 唱

◆ソプラノ

赤岩 真由美
浅岡 里江
浅野 美恵子
天野 朋子
新井 澄枝
荒川 敦子
荒木 葉子
有益 万紀子
池田 直子
石原 美佳
伊田 明代
井出 美香
岩谷 温子
印東 順子
植松 由希
内野 紀代美
宇野 登美子
大久保 千恵子
大倉 恵子
大野 智恵子
大部 淳子
小田 寿
小野 博子
海谷 夏世
加嶋 典子
片倉 裕子
桂 祐子
桂井 裕子
加藤 美土里
金井 奈保子
鎌田 由美子
川口 修子
北原 礼子
杵名 麻美子
窪田 章子
倉田 永子
小泉 莉穂
小島 育子
小島 登志子
小杉 美穂子
小松 幸子
小山 敬子
齋藤 さよ
齋藤 美萌
齋藤 正子
佐伯 日登美
佐枝 陽子
坂口 真理子
櫻 宏美
佐藤 かおり
佐藤 真知子
佐藤 美貴
佐藤 夕月
鹿野 明子
重松 美知子
清水 倫子
白井 牧子
城村 聡子
須田 裕子
須藤 寛子

高井 百合恵
高田 玲子
高橋 敦子
高橋 めぐみ
田嶋 和子
谷合 和子
田村 楨子
千葉 聖子
土橋 恵子
手嶋 幸絵
寺嶋 久江
富永 織江
中井 京子
長沼 良子
中野 真理子
中矢 早保
中山 佳苗
新倉 聖子
野崎 恵子
野瀬 有紀子
野村 和歌子
馬場 直子
日野 純
平井 美穂
藤原 真弓
星野 真琴
星野 真知子
堀内 摂子
堀河 恵美子
本行 佳奈
増田 奈保子
榎谷 節子
町田 皓子
松木 真理子
松崎 千里
松田 聡子
三島 マチ子
水野 あゆみ
峯嶋 房子
三宅 加代子
村井 敦子
森 希宗子
森田 恵子
森安 雅代
矢代 聡子
山鹿 麻夕美
山崎 和美
山下 千恵
吉森 悦子
和里田 孝子

◆アルト

足立 和子
阿部 イサオ
飯村 佳子
石田 直子
石村 友希子
伊東 千春
井上 郁子
今井 洋子
上田 久子

上田 暁子
鶴澤 恭子
宇野 純子
浦上 珠絵
江川 雄子
円道 禎子
遠藤 直子
大谷 麻子
大村 由美子
大藪 知恵子
岡本 敏子
小川 喜恵子
尾川 澄江
奥村 八枝子
小塩 美智
尾見 淑子
小山 歩
片岡 京子
加藤 由紀子
金川 邦子
川崎 浩美
久保田 有紀
窪谷 美幸
熊谷 章子
小泉 香
越川 みゆき
小島 久子
後藤 真理子
小林 幸子
小林 恵美子
小林 恵子
小林 智子
小峯 祥子
斎藤 真由美
坂本 由美子
佐藤 江美子
佐藤 奈保子
佐野 正子
四宮 恵美
島村 和栄
城尾 洋子
菅野 木聖
杉本 八重子
鈴木 道子
清家 純子
曾我石 美佳子
高野 雅代
高橋 京子
田口 登美子
竹内 真理子
武田 絵里
竹中 良枝
竹林 愛
竹村 敏子
田代 淳子
田中 京子
田中 千枝子
田中 美智子
田沼 真理子
玉井 由美

塚原 由梨
辻 美穂
中澤 雅子
中谷 和子
橋原 ひとみ
縄 千晶
根本 澄子
中村 直子
野原 鏡子
野間 里美
橋本 道子
林 道子
藤井 房子
藤本 美穂子
古畑 頌子
古山 静江
干田 信子
細川 紀子
堀部 聡子
松尾 千香子
松丸 節子
松本 淳子
水田 芙美子
村上 亜希子
山田 裕子
山田 ゆかり
山中 知代子
横山 智世
吉田 尚美
吉橋 康子
渡辺 ひろ子
渡辺 文枝

◆テノール

石黒 達也
石本 高雅
板垣 太郎
市川 真三
内川 和典
大沼 隆
大場 和秋
大橋 正雄
岡田 利英
加納 悠悟
佐竹 久典
佐保 佑弥
白川 正憲
鈴木 望
鈴木 謙二
須田 龍乃
曾根 雅俊
高木 茂彦
立山 邦彦
田中 雅史
坪井 一真
中島 晴樹
西谷 亮良
西野 寿宏
兵頭 泉
松永 浩平
水村 秀史

三宅 敦
村田 靖
吉田 啓修

◆バス

浅香 勝
浅見 友一
井出 春夫
伊藤 清
伊原 秀臣
上田 潤
大野 慧人
大村 萌樹
岡 柊斗
小川 輝彦
小河 佑樹
押田 五郎
小野 忠
小原 健治
柿田 浩之
片岡 武彦
金子 憲一
川村 信之
木村 健
久米 倫男
木場 洋行
阪下 史朗
坂本 樹生
佐藤 紘一
篠崎 長英
柴 大元
清水 巖
下矢 道雄
鈴木 正志
鷹取 功
高橋 利明
竹野 巖
谷田 晃朗
玉山 彰彦
辻井 夏暉
露木 正樹
鶴田 真一郎
中嶋 一成
永末 秀伸
永田 義人
長嶺 義昭
西本 圭吾
原田 光
星野 宏充
干場 信之
堀内 晃大
松尾 福生
明 眞英
森 久和
山口 明夫
山城 敬法
若林 正高
渡辺 明春
渡部 智也
渡部 史人
和里田 義雄

児童合唱

オーケストラとうたう杜の歌・こども合唱団

浅井 文華	桑田 陽花	服部 珠季
家住 和花	佐伯 美蒼	服部 瑞季
上田 和奏	笹尾 京楓	平川 逢花
越前 渚	殿村 竜也	風呂 愛明奈
落合 綾	殿村 友紀	増山 香乃
甲斐野 史歩	長谷川 愛	
木口 実緒子	長谷川 渚	

小学生から社会人になるまでの歌の好きな子どもたちが集まって熱い指導の下、練習しています。オーケストラとの共演など合唱団としての活動の他に、年1回、団員一人ひとりが各々の課題曲に取り組む「ひとりひとりの独唱発表会」を行っています。近年、児童合唱だけではなく、変声したメンバーとの混声合唱にも取り組んでいます。

合唱指導 津上 佳子／渡部 智也
ピアニスト 越前 佳織

四街道少年少女合唱団

荻原 彩那	篠原 聖奈	西田 楓
唐木 遙音	高野 柊一	益子 敦
川崎 シタラ 美星	高橋 悠乃	益子 幸枝
川崎 ロシュ 二光莉	滝澤 万里	宮川 優真
菊池 麻結奈	谷野 志帆	保岡 樹季
篠原 楓奈	仲村 珠希	

四街道少年少女合唱団は、1992年に市教育委員会が市内児童に『ウイーンの森少年合唱団』との共演を呼び掛けたことを機に発足しました。現在は3歳～19歳までの子ども達が『美しい声作りと思ひ溢れる音楽創り』を目指し日々練習に励んでいます。

これまで多くのプロオーケストラとの共演やテレビ出演を行い、また、音楽での復興支援や慰問演奏なども行なっています。来年3月22日(日)四街道文化センターで行われる定期演奏会では、子どもミュージカル『赤毛のアン』に初挑戦します。

合唱指導 沖 藍子／吉田 宏
ピアニスト 津久間 陽子／市成 優衣

FCT郡山少年少女合唱団

安澤 ゆり子	齋藤 和	緑川 美月
安西 彩	高野 結愛	森田 結希
石田 日菜	古川 楓葵	吉田 悠花
遠藤 美優	本田 美織	吉田 葵
北田 紗理奈	嶺岸 未明	若林 悠那

1975年、歌大好きの子供たちが集まり誕生、メンバーは現在ジュニア(小1)から高校生まで、歌が好きな子供たちが集まり、渡部昌之先生ご指導のもと、年齢にあわせて楽しく演奏できるオペレッタ等を取り入れ団員の個性を活かした合唱創りを行っています。

毎年行う定期演奏会、チャリティーコンサート、福祉施設への出前演奏、全国大会や国民文化祭等と県内外にての合唱祭への参加。また海外演奏等にて外国の歌大好きな子供たちと交流等々。

FCT郡山少年少女合唱団は、これからも多くの方々へ元気と笑顔をお届けられるような歌声を響かせて参ります。

合唱指導 渡部 昌之
ピアニスト 齋藤 寛美

にしみたか学園三鷹市立井口小学校

石黒 花歩	佐藤 蓮恭	廣瀬 さくら
伊東 美乃里	清水 紗良	古林 花香
井上 知彦	下田 雪乃	星 陽子
上田 涼介	鈴木 優実	本多 心海
奥山 夏帆	鈴木 梨心	松本 夕佳
勝又 愛唯	高橋 寛菜	宮岡 悠登
祇園 茉緒	中畑 鞠歩	柳沢 直哉
國府方 佳那		

今回の演奏会に出演するために結成された合唱団。3年生から6年生の歌が好きなメンバーが集まりました。初めての外国語の歌に、わくわくしたり、悪戦苦闘したり…。練習には、保護者も一緒に参加して、親子で練習してきました。

合唱指導 長谷川 佳子

水星交響楽団

◆常任指揮者
齊藤 栄一

◆コンサートミストレス
亀井 亮子

◆ファーストヴァイオリン

池田 葵
加藤 峻一
◎亀井 亮子
川原 ひかり
國宗 洋子
坂口 弘樹
志賀 優子
鈴木 尚志
鈴木 牧
高橋 広
滝澤 蘭
土屋 和隆
福島 秀哉
前澤 郁弥
宮川 妙子
宮川 雅裕
米嶋 龍昌

◆セカンドヴァイオリン

石川 貴隆
大西 一恵
大西 彩加
織井 奈津乃
黒川 夏実
小林 奏詠
小林 美佳

櫻田 雅信
砂川 湧
高原 苑
田村 奈津子
徳地 伸保
永井 翠
西沢 洋
堀田 淳子
◎森 勇人

◆ヴィオラ

井上 拓
浦 昌平
長田 玲子
川俣 英男
木村 納
◎古宇田 凱
土屋 哲夫
戸田 彩織
藤岡 洋平
三上 さやか
水上 久美
山口 実
山崎 未来

◆チェロ

大久保 雅子
北岡 正英
塩谷 茉莉子
◎首藤 ひかり
鈴木 皇太郎
橋 温子
東郷 丞

中山 憲一
中山 佐知子
東 杏子
日吉 実緒
能岡 雅人

◆コントラバス

石附 鈴之介
大西 功
◎刈田 淳司
小島 辰仁
櫻井 望
長屋 裕大
壽川 賢太
野村 美里
宮田 美香
和田 輝羽

◆フルート

芥川 詩門
大山 司
門脇 文子
神山 真美
中澤 高師
◎本田 洋二

◆オーボエ

菅野 勇斗
黒川 達郎
◎齋藤 暁彦
寺田 吉太郎
野口 秀樹

◆クラリネット

市村 広奈
清水 樹土
◎藤原 誠明
前中 悠輔
山岸 雄作
横地 篤志

◆ファゴット
伊藤 綾香
小田中 優介
木村 駿介
◎富井 一夫
福島 知浩

◆ホルン

伊集院 正宗
大高 直哉
岡本 真哉
◎島 啓
清水 颯太
深村 美佳
山崎 智哉
山城 晴香

◆トランペット

家田 恭介
◎岩瀬 世彦
金子 恭江
神山 優美
浅田 健二†
市川 りを†
遠藤 和樹†
桜井 新†
戸辺 悠大†
林 美紀子†
八木 巧次†
八坂 葉子†

◆トロンボーン

小林 威之
櫻井 統
佐々木 英王
◎佐藤 幸宏
青木 俊輔†
石井 志歩†
犬竹 守†
小笠原 剛†

瀬古 義久†

◆チューバ
植松 隆治

◆パーカッション

石川 誠
上田 祥太郎
岸 敦子
高橋 淳
◎椿 康太郎
山本 勲

◆ハーブ

東森 真紀子
矢澤 みさ子

◆マンドリン

肝付 兼美
田中 昌江

◆ピアノ

山形 リサ

◆チェレスタ

田頭 英子

◆オルガン

大木 麻理

◆ハルモニウム

西澤 央子

◎ = パートリーダー
† = バルコニー

今回お世話になったトレーナーの皆さま

林 憲秀
古野 淳
三橋 敦
柳澤 崇史
山田 裕治

水星交響楽団運営委員会

運営委員長: 植松 隆治
コンサートミストレス: 亀井 亮子
弦インスペクター: 川俣 英男、刈田 淳司
木管インスペクター: 横地 篤志
金管インスペクター: 佐藤 幸宏
打楽器インスペクター: 山本 勲
総務: 伊東 陽子
ステージ・マネージャー: 櫻井 統

会計: 金子 恭江、黒川 夏実
楽譜: 伊集院 正宗、野口 秀樹、宮川 雅裕
運搬: 刈田 淳司
会場: 横地 篤志
広報・受付: 岡本 真哉、鈴木 海里
鈴木 牧、土屋 和隆、東海林 拓人
プログラム: 伊集院 正宗、伊東 陽子
チケット: 古宇田 凱、砂川 湧
レセプション: 織井 奈津乃、永井 翠
インシュペクター: 椿 康太郎、永井 翠
チラシ・プログラムデザイン: 水本 紗恵子

演奏会のご案内

2020
5/17 (日)
13:30 開演(予定)
(13:00 開場)
すみだ
トリフォニーホール
大ホール
全席自由
¥1,500

水星交響楽団 第61 回定期演奏会

指揮 齊藤 栄一
— 齊藤栄一セレクションプログラム —
◇フリテン 青少年のための管弦楽入門
— パーセルの主題による変奏曲とフーガ
◇ブルックナー 交響曲第5番

水星交響楽団 HP <https://suikyoku.jp>
問い合わせ info@suikyoku.jp

2019
12/13 (金)
19:00 開演
(18:00 開場)
東京芸術劇場
コンサートホール
全席指定
S席 ¥1,500
A席 ¥1,000
B席 ¥500

一橋大学管弦楽団 創立100周年記念 第67回定期演奏会

指揮 田中 一嘉
◇齊藤 栄一 前奏曲 (一橋大学管弦楽団創立100周年記念委嘱作品・世界初演)
◇マーラー 交響曲第2番「復活」

一橋大学管弦楽団 HP <http://jfn.josuikai.net/orchestra/>
問い合わせ info.hit.concert@gmail.com